

平成 22 年度定期総会記念講演

「足下の宝を見つめて暮らしをデザインする」

松 場 登 美

(株)石見銀山生活文化研究所 取締役所長

(株)他郷阿部家 代表取締役

当研究センターは、2010 年 8 月 27 日、広島市内において平成 22 年度定期総会と記念講演会を開催しましたので、その講演内容をご紹介します。

講師プロフィール

1949 年三重県生まれ。衣料品・生活雑貨ブランド「群言堂」デザイナー。1981 年、夫のふるさと島根県大田市大森町(石見銀山)に帰郷。実家・松場呉服屋の片隅で布小物の製造、販売を始める。1989 年築 150 年の古民家を修復し雑貨ブランド「ブラハウス」を立ち上げる。以来、数軒の古民家を修復し、生活文化交流の場として活用。1998 年、株式会社石見銀山生活文化研究所を設立。2003 年、NPO 法人「納川の会」(のうせんのかい)発足。理事就任。国土交通省・観光カリスマ百選など、地域づくりや町おこしの分野でも活躍中。

ご紹介いただきました松場でございます。よろしくお願いいたします。

今朝ほど、私は運転ができないものですから、スタッフに運転してもらって、こちらに参りました。あの道路を通るたびに思い出すのは、20数年前、嫁いできて、子育てをしながら台所でこつこつとつくりためたものを、借りたワゴンに載せて、夫と2人、山を越えて、この広島百貨店さんの催し売り場に行商させていただくというようなところからスタートした頃のことです。

当日、売れますと、私は夕方のバスで帰って、夜なべ仕事で一生懸命売れた小物をつかって、また次の日の朝のバスにふろしきを抱えて乗って出てきたというような時期がございました。そしてその途中、夫と道中で将来の夢を語りながら通った思い出がございます。

そして、私どものタグの後ろに書いた言葉、「私たちは石見銀山を愛し、この地に根をおろしたもののづくりをしたいと考えています」という文章は、そのとき考えたものです。まだ石見銀山が全く日の当たらない時代に、自分たちが縁あったこの土地こそ、自分たちに授かった土地だと。そこで自分たちらしいビジネスがしたいという夢は、ずっと持っておりまして。

ただ、今となっては現実が随分厳しい状況になってきて、今日のようにお話をさせていただくとき、いつも思いますのは、立派な都市を背景に立派な経営をなさっている皆様にお話しするのは逆じゃないかと思っています。

先ほど、ご紹介で観光振興とか地域振興という言葉も出ましたが、むしろ私はそれよりも、せつかく縁あったその土地で、たった一度の人生、そこでどう生きたら自分らしい生き方ができるのか、また、喜びが得られるのか、それに向かって邁進してきただけのこと。今日は今までやってきたことをお話しさせていただきたいと思います。だからむしろ、景気のよい話とかもうかる話ではなくて、ハイリスクな話や非効率な話とか、どっちかというと、そんな話が多いと思うんです。

地方といえば地方の産業の振興、経済振興という言葉がよく出ますが、むしろ私は、地域の文化の振興の時代に入ったのではないかと思います。これから先、人口減という現実を抱えた中で、過去のような右肩上がりの経済、ものづくりというのはあり得ない、しかし、成熟した社会の中で、量よりも質、本当にいいものを求めて、より豊かな暮らしを求める人がこれからはふえてくるだろう、だから少量生産でありながら価値の高いものを生産していきたいと、そんなことを考えています。

そして、文化というと、伝統文化の掘り起こしとか保存ということがしきりに言われますけれども、現代文化の創造とか未来文化への挑戦ということについては、あまり出てこないんです。過去のものを大事にすることは大事ですが、新しくまた自分たちが築いていく歴史であったり文化というものが、重要ではないかと思っています。

「復古創新」というのは、私の最年長のボーイフレンドでありました、広島工大の名誉教授をなさって退官され、もう今は亡くなられた大脇健一さんという方の造語ですが「温故知新」という言葉にちなんだ言葉です。「古き良きものを生かしつつ、新しき良きものを

創造する」という意味合いです。

伝建地区に住んでおりますと、ついつい私たちは保存という言葉が強調されますけれども、私はただ保存するだけでは物は生かされないと思うんですね。活用してこそ物は生きると。今日は、古い民家をどう活用してきたかということをお話しさせていただきたいと思います。

今日は、会場が男性ばかりですね。そして、こういう空間というのは日常の私の生活空間には全くない空間で、大変緊張しておりますけれども、できるだけ皆さん、穏やかな表情で聞いていただけるとうれしいと思います。

先日、菩提寺にお参りに行きましたとき、その日は若い修行僧が講話をする日で、先輩の僧侶が、「講話が上手か下手かは語り手の問題ではなくて、聞き手の問題です」というふうに言われましたけど、今日、1時間ちょっとですが、いい話が進められるかどうかは皆さんにかかっていますので、よろしくお願いいたします。

そして、石見銀山というと、今、世界遺産になって話題に上るようになりましたけど、実は私どもは、どちらかといえば、世界遺産になることに危惧を感じていました。そして、世界遺産を目指すという会が結束されて、いろいろな動きもありました。でも、私たちが目指すのは世界遺産なんだろうか。いや、その先にある、もっともっと大きな目標が自分たちの目指すところではないかと思っておりました。

大逆転で、石見銀山は世界遺産になりましたけれども、当初、県が世界遺産にと手を挙げて、銀による経済意義を主張したときは、評価は低かったのです。しかし、鉱山遺跡と自然との共生、そしてその文化的背景ということが評価されたわけです。何に価値があるかということが、これで非常にわかりやすくなりました。銀による経済意義よりも、世界中の鉱山が荒涼とした風景になっているにもかかわらず、大森の銀山は自然と共生して、自然の中に埋もれている、そして伝建地区に指定された町並みは、その文化的背景として評価されたわけです。

石見銀山は、近代化に乗りおくれた、手掘りの昔ながらの鉱山だったということが評価された。そして文化的背景という町並みは、鉱山の町が閉山後、過疎化して、経済発展に立ちおくれた。だからこそ、あの町は残ったんです。もし、あの町が経済発展していたら、今の町並みは残っていなかったと思うんです。そういう意味では、大変皮肉なことではありますけれども、何が評価され、何に価値があるかということを私たちは学ぶことができました。

自然だとか歴史だとかそして何よりも人情だとか、綿々と紡がれてきた生活文化・暮らしにこそ意味があるということを今とても実感しております。そして今、世界遺産になったからには、世界遺産にふさわしい町のありようとか人の暮らしようであるとかを、大切にしたいと思っております。

実は、私は10数年前、イコモスという世界遺産を選定する組織の日本代表であられ、また、東京大学の名誉教授であられる西村幸夫先生と出会ったんです。大森に講演に来ら

れたときに、1冊の本をくださいました。それは、イギリスのトラスト運動の本でした。イギリスの片田舎で、古い民家を手に入れたおばあちゃんが、せっせと庭を手入れし、すてきなインテリアを施して、いつも周りの人が集まってきて、そして、その周辺の家を直しては人に譲り、とうとう7軒の家を直したというような事例が載っておりました。

当時、大森の町は廃墟となった家がたくさんありました。これは、大変な財産だなと思いました。20年の間に、とうとう私たちも7軒の民家再生をすることになりました。まさかその本との出会いからこうなるとは思いませんでした。世界遺産になったときに西村幸夫先生からこんなメッセージが届きましたので、ちょっとご紹介いたします。

「大森の町に思う。かつて私は群言堂の企業としての生き方を、ライフスタイル産業と称したことがあった。楽しい田舎暮らしといった斬新なライフスタイルを提案する企業という意味である。そして、そうした企業こそ21世紀に必要なのだという思いも込めて。今、大森は石見銀山の世界遺産登録という行政の動きの渦中にある。大森の人たちが世界に誇れる歴史を有しているということにプライドを持つことはいいことに違いないが、他方、世界遺産のレーベルが、これまで大森が発信してきたライフスタイルと無縁な人たちを呼び寄せてしまうのではないかという危惧を抱いていることも知っている。確かに、その心配はあるだろう。だからこそ、別の意味で期待を持ってしまう。つまり、世界遺産騒動の中にあっても、ぶれることなく、これまで進んできたライフスタイル都市の実績の上に立って、自信を持って来訪者に、静穏で、かつ意味深い大森の暮らしを発信し続けること、そして、そうした環境を維持できるよう、来訪者をも巻き込んで、これまで構築してきた理想のライフスタイルへ向けて歩みをとにもするような、そんなムーブメントを維持することを。そのとき大森は、ライフスタイル産業、ライフスタイル都市の世界標準になるかもしれない。ちょうど、アンチ・マクドナルドに端を発したイタリアのスローフード運動が世界的な広がりを見せたように。大森が世界を名乗るときには、そんじょそこらの世界遺産なんかではなく、こんな構想を持ってもらいたいものだ。これまでの成果に敬意を表しつつ、これからも期待しています」というようなメッセージでした。

イタリアの小さな村からスローフードという言葉が端を発したわけですが、今や世界に広がっていきました。

私たちは、世界遺産、大森の町に住みながら、できれば、このライフスタイル、低消費でありながら質の高い、ライフスタイルを残していきたいと考えております。

実は私は三重県出身で、先々月でしたか、三重県主催の「地域の力」というシンポジウムにお招きいただきました。法政大学の田中優子氏の基調講演は、とても興味深い講演で、大変勉強になりました。

江戸時代、当時のパリがごみの山だったにもかかわらず、江戸は大変な人口を抱えながら、とてもエコで、きれいな暮らしがそこにあったということでしたね。例えば紙一つでも、徹底的に使って、最後、灰にして、灰さえも灰問屋が集めて、またそれを肥料にしていたという。また、人糞にしても人糞問屋というのがあって、人夫がそれを集めて、それ

を肥料にする。徹底して循環した社会がつくられていたという話でした。

つい一昨日ですか、ある冊子に、また田中優子さんの文章が載っておりまして、「エコ循環社会」と、「多様な人々を包容する、支え合う、不安のない社会背景が江戸にはあった」とありました。

落語に「江戸っ子は宵越しの金は持たねえ」というせりふがありますが、あれは、無駄遣いをするということではなくて、お金がなくても支え合う社会の背景があったという意味があるそうです。世間のために働き、人のためにお金を使う。そして、多様な人々を内包するという美学が江戸にはあったというようなことが書いてありました。

石見銀山は、江戸時代に一番ピークを迎えて、栄え、そして私が今住んでいる家は、阿部家という江戸時代に建てられた建物です。そういう町に住みながら、江戸文化というものをもう一度見直して、支え合うコミュニティーであったり、エコな循環社会であったりすること、それこそ世界に誇れる世界遺産、石見銀山と言えるのではないかと考えております。

それでは、映像をお願いいたします。

今日は話を、企業としての生き方、地域住民としての生き方、個人としての生き方、と3つの立場からすすめたいと思います。

そして、「美のものさし」「豊かさのものさし」「幸せのものさし」と、それぞれに書いておりますけれども、この物差しというものは価値をはかる物差しです。かつての日本は権威主義であったり、欧米崇拜であったり、中央依存であったり、そういう価値観というのを、もうそろそろやめましょうと。自分たちなりの、自分の心が決める、自分独自の物差しを持つことによって、独自性がつくられていって、新しい価値を見出せる。そういう物差しが必要ではないかと思えます。

過疎のどん底。私が嫁ぎましたときは500人ちょっとでしたけど、今や人口は410名になりました。そういう過疎の町で、自分なりの物差しをつくることによって、新しい価値がはかれるようになりました。

「美のものさし」は何を美しいと見るかということですね。新しいものばかりが美しいと見られがちですけど、実は大森の廃墟と化した古い民家も、手を入れれば近代建築にはない美しさを発揮し出したのです。

そして、「豊かさのものさし」。5年ほど前ですけど、国の派遣事業でブータンという国に行かせていただきました。もう皆さんご存じのように、ブータンはGNPよりもGNH——ハピネス、つまり国民総幸福量というのを国の指標にし、また、観光政策においては、ハイバリュー・ローインパクトといって、高い価値を持つことによって自然環境や文化環境への衝撃を小さくするという考え方です。その意味で、観光政策においては入国制限を設け、また、海外からの観光客は1人1日200ドルから250ドルというお金を払わなければいけない。ブータンという国の経済からいくと、相当高額です。本当の豊かさとは何だろうということを、ブータンの国で学ぶことができました。

そして、「幸せのものさし」。まさに幸せそのものは、自分の心が決めるのではないかと思います。

つい先日、私の「他郷阿部家」という宿にお泊まりになった男性は、奥様を最近亡くされたということでした。「妻に苦労はかけたかもしれない。しかし、不幸にはしなかった」。苦労はあって当たり前。でも、その苦労が不幸なのか幸せなのか、本当にその心が決める、心一つだなとつくづく思いました。世紀の名言だなと思いました。

私の友人に、高知県に梅原真というデザイナーがおります。大変活躍しておられるので、ご存じの方もあるかもしれませんが、このたび、梅原さん自筆の著書と、もう一つ、日本経済新聞から、「おまんのモノサシ持ちや!」というタイトルの本が出ました。そして、彼がいつも言うことには、「みんな、都会を見ている。外を見ている。しかし、足下を見て、自分たちの、価値の物差しを持つことによって、幾らでも宝物は見つかる」と。「国から与えられる、文化庁が決めてくれる文化財だけが文化財ではない」と。彼は、県の広報紙の中に「勝手に重要文化財」というのをつくりまして、これこそ高知の文化財じゃないかというものに「勝手に重要文化財」というスタンプを押した記事を書いているんですね。

彼の仕事はデザイナーですが、一次産業をデザインするデザイナーなんです。農業、林業、漁業をデザインすることによって経済を動かし、また、そこに産業が新しく生まれ、そのことによって風景が守られる、そのためのデザインをする、という価値観を持った方です。もし書店で見つけられたら、ぜひご覧になることをお勧めいたします。次、お願いいたします。



これが石見銀山、私が住む町ですね。仙ノ山という、昔、銀を掘った山から見おろすと、こんな風景です。山の谷合いにほんの一筋残った集落、そこに私どもは、本社と本店を構えております。そして、我が社の社是は「We are here!」。

ある本で読んだのですけれども、人間の成長とか欲望の5段階の一番高いところが自己実現ということをよく言われますけれども、その本の中には、もう一つ高いものがあるのではないかと。それは、自己実現よりもコミュニティーによる実現であると。みんなが力を合わせて、みんなで喜びをともにできる、実現すること、ということで、私は「I am here!」でなくて「We are here!」という言葉を使いました。そして、ある方が教えてくださった

のは、「I am here! I ought to be!」という言葉がある。私はここにいる、いるべきところにいるという言葉だそうです。

私は、若いときから好き勝手放題しましたから、この風景、大変な過疎のどん底の……。当時は伝建でもなく、世界遺産などうわさにもなかったですから、親きょうだいからは、親不孝もしたし、罪人は昔は島流しになったけど、あなたは罰が当たって、国流しで石見銀山に行くようになったというふうにも言われたぐらいの状況のところ嫁ぎました。そして、形ばかりの結婚式を挙げたときに親戚筋のおじさんから贈られたのは、「草の種は、たとえ落ちたところが岩の上であっても根をおろさなければならない」という大変厳しい言葉でした。しかし、そこが厳しい岩の上なのか、また、自分を育ててくれる豊かな土壌なのか、それは心持ち一つだなと思うようになりました。

そして、母が口癖のように言っていた言葉は、「授かり」という言葉でした。「もし悪いことがあったら、それはあなたに乗り越える力があるから努力なさい。もし、いいことがあれば、それはあなたの力ではなくて、授かったものだから感謝なさい」と。

まさに、夫・松場大吉は自分に授かった人であり、この石見銀山は自分に授かった土地である。そして今、私は、アパレルという業界にも片足を突っ込むような仕事をしております。今日、着ているのも全部、自社のものですけれども、こういうふうにテキスタイルからデザインして、服をデザインして販売する仕事をしています。

実は、全くデザインの勉強もしたことない、反抗して絵ばかりかいておりましたので、洋裁も習ったことない。全く、デザインだとかテキスタイルのことも洋裁のことも何もわからない、流行のものも見ることもない。こんな田舎に嫁いで、服をつくる仕事をするなんて、私は奇跡だと思うんですが、これも、ここに生きるという覚悟を決めた私に天から授かった仕事ではないかと思えます。

そして、授かった場所、授かった人、授かった仕事であれば、どんな意味があって私に授かったんだろうと考えるようになりました。そして、自然があり、歴史があり、人情がある、こんな3拍子そろったいいところはないなと思いました。次、お願いします。



そして、これが私どもの本社、生活文化研究所の本社です。私たちは、ここに 1000 坪の土地を買い、社屋を建てると決めたときに、まず行ったことは、この前の田んぼの方に了解を得て、あぜ道をつくりました。そして、丸太の橋をつくりました。それから、コンクリートのU字溝を掘り起こして、石積みの小川をつくりました。それから、広島県甲山町から縁あって、250 年前のカヤぶきの家を移築しました。それから後に、後ろの社屋を建てました。

そして、日本の原風景——田んぼがあり、山があり、建物があり、小川がある、そういう原風景を壊さない風景として社屋をつくるということが、6 年構想の後にでき上がっていきました。私たちは何年も何年もかけてつくっていったんです。この社屋は6 年という年月をかけました。

そして、あの大屋根は、ちょっと見にくいですがけれども、私どもの地域は石州瓦の産地です。石州瓦の、10 幾つも屋根を連ねた昔の登り窯が地元に残っております。20 数年前に閉鎖されたその登り窯の中に、最後に焼かれて残っていたかわらを買わせていただいて、屋根にふきました。約 4,000 枚近い枚数でしたけれども、見事に今は微妙な色合いがあって、子供のときに写生で絵をかくときは、屋根瓦 1 枚ずつ、ちょっと微妙に絵の具を変えたものですけど、今は 1 色でべたっと塗れるような瓦になりました。今や、この古い登り窯で焼かれた瓦を瓦業界の人が視察に来られるような時代になりました。

そして、私どもの会社には、会社の 6 カ条というのがあるんです。その中の一つに、「平成の民芸活動」という言葉があります。「できることなら、この仕事を通して、この地域に活力を与え、地域の環境と景観を保全していきたい。これが私たちが理想とする企業としての社会還元です」という言葉を書いております。大企業の社会還元というと、文化事業であったり、大きなお金の寄附金であったり、いろいろしますけれども、私たちは貧乏な会社ですけど、せめてこの地域の景観を守り、保全し、そこに元気に働く私たちの姿がある、そういう景観を大事にしていきたいと思います。

そして、最近出会った、あるカメラマンが「柴門草舎風塵を絶す（柴門草舎絶風塵）」という言葉がぴったりだなと教えてくれました。柴門草舎というのは、柴の門、草のいおり、つまり質素な暮らし。しかし、風塵を絶す。世間のちりが入ってこない清らかな空間であるというような意味だそうです。早速、「柴門草舎絶風塵」というお札をつくりまして、このカヤぶきの家の玄関に張りました。はい、次、お願いします。



とはいえ、社屋の中は近代的な設備が整い、若者が元気に働いております。ヨーロッパでは古い建物、景観を残し、中は近代的に活用していることが多いですけれども、まだまだ日本は、大企業といえども、景観に配慮するような社屋をつくるということはなかなかありません。



私たちは、社屋を建てるためにこの1,000坪の土地を買い求めました。そして、何とかこの景観を壊さない、私たちらしい社屋ができないだろうかと考えておりましたら、『中国新聞』に、「カヤぶきの家が解体される。引き取り手を募る」という記事が出ました。そして、私たちはこの家を移築することになりました。

日本の住宅の建築の建て替えサイクルが今、26年だそうです。これは公に発表された年数で、間違いがありません。26年ですよ。ローン組んで、人生をかけたマイホームが26年の寿命。何と悲しいと思いませんか。この家は250年前のものです。さらに、それからもう10数年たちました。木はその育った年数が経たころから強く美しくなるんだそうですね。本来のクオリティーを発揮し出すんだそうです。

例えば50年かけて育った木は、50年たった後から、その本来の強度を発揮し、最高のクオリティーを発揮するそうなんです。この建物を移築したときに思いましたことは、物を残さない技術も残らない、職人さんも残らないということです。

この建物の1年間かかって移築した風景をずっと撮って映像をつくったものがありますが、何度見ても感動します。見て気がついたんですね。最近の家は、建築材料のほとんどが工場から運ばれてきます。しかし、この家は木であつたり竹であつたりワラであつたりカヤであつたり、すべて自然の中からつくられているんですね。

そして、カヤのふき替え。カヤをふき替えなければいけないとなると、そのカヤの生息する環境も守らなければいけないんですね。そういう意味で、環境の保全と建築というものがうまく循環している、こんなすばらしい建築はないのではないかと思います。

そして、何とこの家は、ここに来たのが3度目の移築だそうです。次、お願いします。



これが、30数年前、私が夫について大森の町に嫁いできたときの大森の町並みの風景です。この左側、「たばこ」と書いてありまして、自販機があります。これが夫の実家でした。若い夫婦が帰ってくると、古い家ではかわいそうだろうということで、夫の両親が、外壁をモルタルで塗って、窓にはサッシを入れてくれたんですね。次、お願いいたします。



数年後、モルタルをはがし、サッシは障子と雨戸で隠し、せっかく敷いてくれた廊下のじゅうたんをはがして、無垢の板をもとに戻しました。これは、まさに時代の価値観としか言いようがないんですけども、夫の父は、地元の商工会の会長もしておりましたので、この町並みの中で、うちが一番最初に自販機を入れたというのが自慢の一つでもありましたが、私たちは自販機のない町を目指そうということで、率先して自販機を撤去しました。

そして、私たちがここに店を構えるときに、社屋をつくる時もそう、7軒の家を直すときに常に心がけたことは、その土地に敬意を払う、そして家に敬意を払う、また、先人に敬意を払うということでした。たとえ自分たちがここでビジネスをする、また商売をするということになっても、この景観を壊さないように、配慮しました。この右側が本店の正面になりますけど、一切、商品は通りから見えないようにしました。

今、世界遺産になり、一時は大変な数の観光客が押し寄せたときがありました。例えば、この軒先にお土産物を山積みすれば、1日相当の売り上げは簡単にできかもしれません。しかし、私たちは、この町の景観の美しさに敬意を払い、店は靴を脱いで上がっていただいて、奥の奥に商品を控えるようにしました。

そして、23年前、伝建地区になった直後ですね、まだ伝建で改修された家は2軒ほどしかありませんでした。ここが3軒目の事例だったと思いますけれども、「こんなところに店をつくっても、だれも来んぞ」と。JRも通らない。1日にバスが数便しかない。そんなところに店をつくることを、だれもが反対しました。しかも、この建物は300坪近い大きな建物でした。何と私たちは、この建物を、18年かかって店を完成したんです。それでは、次、お願いします。



これが、改修前の表通りです。次、お願いします。



これが、改修後の表通りです。次、お願いします。



これが、改修前の本店の中庭の部分です。次、お願いします。



これが、先ほどの庭。全く同じ場所、同じアングルから撮って、今の状況です。そして、これを見てもわかるように、下にはまくら木を敷き、流木を拾ってきたり、また、木の電柱を使ってテーブルをつくったり、世の中が捨てたもの、時代が捨てたものこそ私たちは拾い、生かしていこうということを決めました。なぜならば都会は経済性優先、効率優先、そういう経済優先の中で、大切なものが捨てられ壊されてゆく。しかし、田舎は非効率なことにこそ、意味を持たせていく。そのことが田舎のゆとりになり、また、安らぎになるんじゃないかというふうに思いました。

そして、戦後、日本は、役に立つことしか評価しない。しかも、即、すぐに役に立つこ

としか評価しないようになっていきましたけれども、無駄なことや、役には立たないかもしれないけれども、大変重要な役割をするものがたくさんあったはずです。そういうものを、私たちは大事にしていきたいと思うようになりました。次、お願いいたします。



本店の玄関を入ってすぐには、スタッフが当番で、このようなディスプレイをずっと 20 数年、やってきたんです。1 年に 4～5 回、このディスプレイは変えていくわけですけど、これはメーカーとしてのメッセージをここに込めました。そして、ディスプレイもそこにあるものを使う、または、世間が捨てたものを使うということで、今は、銀山のころは大変役立てられた竹が、山を荒らすということで邪魔者扱いされますけれども、私たちはその竹を使って、いろいろなメッセージを送り続けました。これは、見通しのよい年になりますようにという、お正月のディスプレイです。次、お願いします。



これは、出雲大社の大木、巨木にも負けない、おみくじを結んだ竹です。



これは、竹の根っこを掘り起こして逆立ちさせました。島根は、まさに根の国と書いて島根です。私が 30 年前に嫁ぎましたときは、島根は根の国、まさに字のとおりだなと思いました。なぜならば、食品加工場もある、縫製工場もある、下請工場がいっぱいあるけれども、商品が世に出るときは都会のブランド名しか出ない、花も咲かない、実も収穫できない、貧乏な県だなと思いました。しかし今、30 年そこに住んで思いますことは、これからは根のあるところこそ生き残れる時代だというふうに思います。そして、そのメッセージを込めて、「根の力」というタイトルをつけました。

そして今日、皆さんにお配りしております新聞のような包装紙がございます。後でご覧になってほしいんですけども、その裏面が芋判で、水の花という海の植物プランクトンがデザインになっております。実は、つい最近まで、私どもの包装紙は手すきの和紙で、袋もととてもぜいたくなものを使っておりました。

しかし、ナガオカケンメイさんというデザイナーは、いま話題になっておりますが、新しいものをつくらないデザイナーなんですね。過去のよかったものをもう一度掘り起こす、そういう働きをしていて、そして彼の店に行きますと、いろいろなデパートの、お客さんが持ち込んだ紙袋に「D&DEPARTMENT」という彼のお店のシールをぺたっと張って、再利用しているんです。

ああ、そうだな、これからはもう、包装紙にコストをかける時代ではないなと思いました。そして、コストを下げるために紙質を随分落としました。しかし、我が社なりのメッセージを伝えたいと思い、新聞の包装紙にしました。

私の母の時代は、包装紙というと、みんなきれいに畳んでとっておいて、何かのおすそ分けというと、その包装紙で包んで、近所にお配りしたものです。しかし、今は、きれいな包装紙は当たり前で、すぐごみ箱に行く。すぐごみ箱に行かない包装紙をつくるにはどうしたらいいかということで、自分がいろいろと書きためました文章を新聞仕立てにして、そこに載せたんです。今、大変好評で、「次はいつ出るんですか」と言われているんですけども、そんなに新しくつくりかえるわけにはいきませんけれども。

海の植物連鎖の原点になっているプランクトンは、小さな微生物でありながら 5,000 種類いると言われていて、地上では絶滅危惧種という言葉が聞こえるようになりました。企業にしても、大きな企業と大きな企業、かつては思いも寄らなかった企業同士がくっついて、小さな企業が消えていく。しかし、本当にそれでいいのだろうか。プランクトンのように、5,000 種類も存在する多種多様のものが存在する地球が、本来、一番理想ではなかったのだろうかということの思いも込めて、デザインした包装紙であります。次、お願いします。



これが「群言堂」という、私どものブランドができた原点になった家です。これは、文明を排除した家なんです。私どもの家には、しょっちゅう人が集まってきてお酒を飲む席があるものですから、1軒、そういう、お酒を飲むための家をつくろうかということで作った家なんです。大森の伝建地区の中でも、一番小さくて一番質素な家です。ここを改装するときに夫が言ったのは、「いっそ、文明を排除しよう」と。電気、ガス、水道のない家にしよう。

なぜならば、戦後日本は、三種の神器というのがありますけど、文明の利器と呼ばれるものを生活の中に取り入れることが文化的な暮らしであり、ぜいたくであり、豊かな暮らしだと思ってきたけど、それを全部手に入れて、本当に豊かになったんだろうかということに疑問を持つようになりました。そして、文明を一切排除して、和ろうそくの明かりと、いろりの火だけでお料理をし、お酒を飲むような空間にしました。

「犬馬難鬼魅安易（けんばむつかしきみやすし）」という言葉が、中国にはあるそうです。白洲正子さんの「武相荘」の玄関にもその文字がありましたけれども、どういう意味かといいますと、中国の皇帝がお抱えの絵かきに、何がかきやすくて何がかきにくいかと聞きましたら、「犬馬難鬼魅安易」という答えが返ってきたそうです。「犬馬難（けんばむつかし）」というのは、犬とか馬とか、当たり前暮らしの中にいるものをかくのは大変難しいと。しかし、「鬼魅安易（きみやすし）」。鬼とか化け物のように、派手でグロテスクだったり大げさなものをかくのは大変簡単だと。

白洲正子さんの本の中にも、西洋の花のように山ほど花を生けるのは簡単なことだけど、スイセン1輪、椿1輪、生けることのほうがずっと難しいというようなことを書いておられました。まさに私たちは、店をつくるにも景観を守るにも、その「犬馬難鬼魅安易」という、当たり前の風景を残すことに力を入れていったわけです。はい、次、お願いします。



そして、中はというと、こういう質素ないろりがあって、ここは本当に素のままになれる空間、または五感のよみがえる空間と呼んでおります。私も携帯電話を持っておりますけれども、今、もう携帯電話を持ったら、電話番号が覚えられなくなりました。かつては、実家であったり兄弟の家であったり、親しい友人の家の電話番号、10 けたぐらいの番号が幾つかは暗に覚えていたんですね。今は、新しく出会った方の電話番号は、短縮に入れてしまうと、もう覚えることがないんですね。

それほど私たちは、文明に頼る生活をするようになった。人間本来の力というものは退化しているのではないかと思うんです。進化しているのは、この携帯をする指先だけかもしれない。そして、ある方が、現代人は文明に麻痺しているというような言葉をおっしゃっていましたが、もっともっと人間の本来の五感を磨き、ひょっとしたら第六感まで磨けるかもしれない。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』という本がありますけれども、まさに陰翳礼讃の世界というのは、日本のわびさびもそうですし、日本の建築であったり、空間の美しさであったり、こういうものであったのではないかと思います。

ある本で読んだんですけれども、「四十八茶百鼠」という言葉があるそうですね。日本には、茶色でも 48 種類、ネズミ色に至っては 100 色あるという、それほど微妙な変化を表現する感性を日本人は持っているそうです。しかし、今はどうでしょうね。

かつて、「イエスとノーが言えない日本人」という、日本人のあいまいさを風刺した本が出ましたが、私はとんでもないと思うんです。日本人は、イエスとノーの間に限らない答えを持っていて、そこには思いやりであったり、いろいろな配慮であったり、微妙な感覚であったり、そういうものがイエスでもない、ノーでもない。

漢字、片仮名、平仮名を使える言語を持つ国というのは、世界に日本だけだそうです。しかも、漢字というのは、記号ではなくて意味も持つ文字です。本当に大事にしたいと思います。はい、次、お願いします。



この空間の中でいろりに火をおこして、こうやって和ろうそくの明かりで、お酒を飲む。上から2番目の写真ですね、夜のチョウと呼んでいるんですけども、和紙1枚の影がチョウチョウの羽のようになっております。和ろうそくは、炎が揺らぐんですね。炎が揺らぎますと、チョウチョウが羽ばたくようなデザインになっておりまして。道具そのものが

デザインではなくて、炎が和紙を通してその影がデザインされているのです。次、お願いします。



13年前に立命館の学生さんで、2人で旅している子がいたんです。そして、あのカヤぶきの家に泊めてあげたのが縁で、翌年から10人になり20人になり、多いときは30人近く、ほぼ20人前後の子が毎年、もう12年続いて合宿に来てくれるんですね。

そして、先ほどのろうそくの家の中で私たちがお祝いの席を持っておりましたら、ちょうど彼らが来ているときで、薨（しとみ）戸といいまして、昔の建具ですので上に立ち上げて、下は全部外すことができます。道路を舞台に演奏したり、歌ったり踊ったりしている学生さんを家の中から撮っている写真なんです。

こんなすばらしい、映画のワンシーンを見るようなことができる町というのは数少ないのではないかと思います。

そして、たまたまですけど、昨夜、この立命館のOBの子が2人、結婚するということが訪ねてきてくれました。そして、我が家には今、インターンシップで来ている学生さんが1人いるんですね。彼がフラメンコギターで、すばらしい演奏をするんです。OBの子のビオラとフルートで、我が家の小さな狭いリビングはすばらしいコンサート会場に変わったんです。感動的でした。

大きなコンサートを開くとか、有名な人を呼んでくるとか、それが町おこしではなくて、小さな出会いであっても、それを広げていったり深めていくこと自体が、町にとって、次に残していく大事なことはないかと思います。次、お願いします。



これが私が今、住んでおります阿部家という家です。1789 年、寛政元年創設の家ですね。大久保長安が初代の奉行として銀山に入るときに、召し抱えてきた阿部清兵衛という人が建てた家です。買い求めましたときは、もう廃墟と化していました。外から見るとまだしっかりしているようには見えますけど、実は……。次、お願いします。



この台所も、ひどい状態になっていましたね。まさにもう廃墟でした。実は本店のほうも、今見ていただいたぐらいの傷みようだったんです。それを 18 年かけて改修したんですけど、阿部家は 10 年かけてやっと「他郷阿部家」という会社を設立して、宿にしました。次、お願いします。



これが玄関です。「復古創新」、古きよきものを生かしつつ、新しい良きものをつくる。220 年前の家を生かしながら、民家再生とは単に建物を再生するだけではなくて、そこに暮らしも再生していかなければ意味がないと思うようになりました。

夫とは、仲良し町内別居と称しまして、それぞれの自立した暮らしを尊重し合いながら、別居をしておりますけれども、私はこの家に住みつつ、宿として、また研修の場所として、学生さんたちとかゼミの方にはまた違う価格帯で提供したり、また時によっては町内の皆さんの年末のもちつきの会場になったり、花見の席になったり、1 軒の家を宿という一つの目的だけではなくて、いろいろな多様な使い方をしております。

これは県の文化財指定の家ですけれども、文化財の指定の家だからといって、窮屈な暮らしだったり、「昔はこうでした」という陳列だけを見せるだけでなく、まさに生の暮らしをそこにしていく。今、観光、観光と言いますけれども、バーチャルなことは幾らでもできる時代になりました。しかし、本当に私たちが感動するのは、リアリティーです。リアリティーのある暮らしをそこに展開していくことによって、観光に来られた方が、喜ばれるのではないのでしょうか。後で出てきます昔の台所でご飯を召し上がっていただいて、時には私の家族であったり、近所の人であったり、いろいろ、みんなが大きな食卓を囲んで、一緒に食事をいただきます。次、お願いします。



これが玄関の間です。近所の吉田さんという鉄の彫刻家がつくった彫刻が置いてあります。



これが、吉田さんがつくった鉄のテーブルと照明。古い家というのは、暗いところがあって、光が入ると本当に美しいんです。毎日暮らしていても、毎日その光の美しさに感動するんです。

私たちが子供のころ、悪いことをすると、「蔵へ入れるぞ」と言われました。実際、蔵に入れられたこともありましたが、本当に昔の親はいい教育をしてくれたなと思います。明るいところで面と向かって親が説教するよりも、暗い蔵の中に1人で入れられて、最初は恐怖心があるんですが、そのうちに神秘的なものを感じたり、自分みずからの中から、ああ、悪いことをしてはいけないなという反省の気持ちがわいてきたり、子供に対する教育としては理想ではなかったかなと思うようになりました。次、お願いします。



これが、蔵の2階を改修したベッドルームですね。はい、次、お願いします。



これも、大森が気に入って住んだ、ワイルズ・アレックスさんという彫刻家が湯舟をつくり、また、左の端、ちょっと見えにくいのですが、暖房するときのまきストーブは吉田さんがつくり、みんなでつくり上げていったおふろです。

「群言堂」という言葉は、群れの言葉の堂と書くんですね。みんなが目線を一緒にして、わいわい好きなことを言いながら、いい流れをつくるというので、理想的だねということで群言堂という名前にしました。

しかし、後から出てくると思うんですが、東京のＪＲの高尾駅北口に、このたび、食の店を作りました。群言堂の店と二つが並んで、駅舎の中に店をオープンしました。食のほうを「一言堂」にしました。群言堂という言葉の説明するときに、今まで私は、「群言堂というのは群れの言葉の堂と書いて、みんながわいわい言いながらよい流れを作ることで、その相反する言葉が一言堂で、権力者が上から物を言うから、これはだめなんですよ」と言ってきたんですけど、食べ物ばかりは、辛いもの好き、甘いもの好き、やわらかいがいい、かたいがいいと、みんなが好きなことを言い出したら、結局、おいしいものができないんじゃないかと。１人の人が「これは、うまい」と言えば、それでいいんじゃないかということで、冗談のように群言堂と一言堂が並んで店ができました。次、お願いします。



これが私の一番好きな、阿部家の台所ですね。今や、台所というよりはキッチンがふさわしいというか、フローリングにして、ＩＨの、火のない安全といたしますけど、あれこそ私は危険なキッチンだと思っておりまして。人間が、火を使うことがなくなるということこそ、私は大変危険なことではないかと思っています。古代から、人間の暮らしというのは火をおこすところから始まって、食事をつくり、暖をとり、火を囲んで、そこでコミュニケーションをとった。暮らしの中心には、必ず火があったんですね。今や、若い子でも、マッチをすることさえできない子がいますけれども、私は火のある暮らしが大事だと思います。

そして、おくどさんでご飯を炊きます。勘を使う仕事を大事にしたいと思っているんです。今や、ほとんどがコンピュータがやってくれるので、人間は勘を使うことがなくなりました。おふろでもスイッチ一つで温度設定ができますから、「湯かげんはどうですか」と

いう言葉さえも、もう死語になりました。私は、勘を使う仕事こそが人間の生き延びていく力といいますか、大事なものじゃないかと思います。

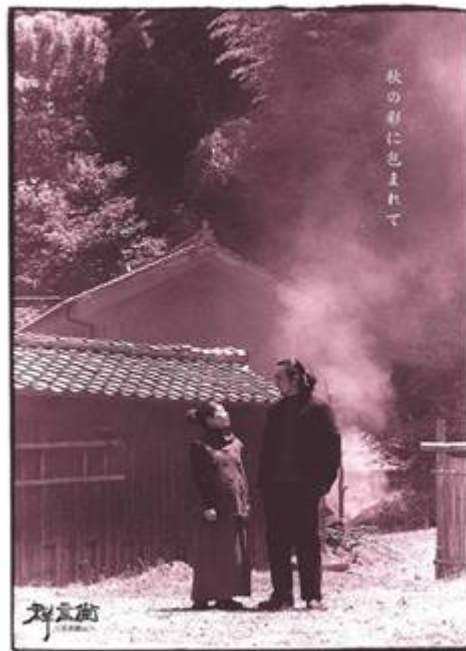
ビジネスをしていますが、かつての成功事例は、決してもう参考にはならない時代です。この厳しい時代を生き残るには、もう直観力を磨くしかないなと思っておりますけれども。例えば、まきでご飯を炊く。スイッチ一つでも、炊飯器でちゃんとご飯は炊けます。しかし、まきでご飯を炊こうと思えば、水かげん、火かげん、蒸らしかげんと、かげんを3つも見なければいけない。そういう勘を使うこと。

だから、昔の女性というのは、本当に生活能力があったと思うんです。手塩かげんという言葉がありますけど、メジャーとかを全く使わずに、手でぱっぱと味つけができた。みんな勘を使って、高学歴の人は少なかったかもしれないけれども、生きることに関しては能力を持った方が多かったのではないかなと思います。

そして、ここ島根県は、やおよろずの神の集まってこられる県ですけれども、私は、やおよろずの神のおられる台所と言っているんです。そして、やおよろずの神を認める国こそ平和の象徴、一神教の国では争いが起こりがちですね。日本文化の融通性であり、また、他を認めるという考え方であり、自然の中にも神や仏が存在するという考えこそ、もっともっと大事にして、世界に発信すべきではないかなと思っています。

そして、ここにはおもしろい、「もったいない神様」という私のオリジナルの神様がありまして、ごみ箱から拾ってきたきれいな紙なんですけれども、それを三方に載せて、おくどさんの上に置いて、「もったいない神様」だといつも手を合わせているんです。荒神様、水神様。母がいつも、「ここ台所は神様がいらっしゃるから、汚いものを置いてはいけません、刃物を置いてはいけません」とか、いろいろ教えてくれた。そういう生活文化こそ、私はこの家を通して、また次の世代に伝えていきたいなと思っています。次、お願いいたします。





アパレルという業界におりますので、年間何回か、こういうダイレクトメールを送りますけれども、顧客様に送るダイレクトメールは、大森の町を舞台に、社員がモデルで写真を撮ります。アパレルというと、海外のモデルさんだったり、海外まで写真を撮りに行きますけど、根のある暮らし、また、自分たちの足下にある宝に光を当てていくメーカーであるというこのメッセージとして、こういうふうなダイレクトメールをつくっております。次、お願いします。





「根々」という娘世代が、新しいブランドをつくりました。テイストは多少変わりましたが、この地で、社員がモデルという考え方はそのまま引き継ぎ、先ほど、私の「登美」というブランドのモデルになっていたキミさんという子のおなかには、当時8カ月になる赤ちゃんがおりましたけど、その子が生まれて、ふわりちゃんといいますが、上側の写真ですね、お母さんと一緒にまたモデルになってくれている。また、営業部の宇谷君の一家がモデルになってくれている。毎回、町内の人であつたり、社員がモデルとなって、ダイレクトメールをつくっております。次、お願いします。



「鄙の雛祭り」というイベントを10年しました。なぜならば、私が大森に嫁いだときは、外にこそぜいたくがある、都会こそすてき、海外のブランドのものこそすてきというふうな風潮がありました。しかし、足下にある宝に気がつき、自分の授かったものに満足して暮らすことが一番豊かではないかと思い、「田舎に暮らす女性の意識を高め、より豊かな暮らしを考える」というテーマで10年間イベントをしました。そして、「みんな外を向いているけど違うでしょう、足下にこんな宝があるでしょう」と、いろいろと地元の女性の皆さんに……。

私は、女性が変われば、世の中が変わっているんです。なぜならば、食事にしても衣料にしても家でも、ご主人の意見も入るかもしれないけど、圧倒的に日々使うのは奥さんであって、女性が消費の中心になっていて、消費を担っていると。女性の価値観が変われば、世の中を変えることができるのではないかと私は思っているんです。そういう意味で、女性のイベント「鄙の雛祭り」、田舎の女性のお祭りということで10年しました。

しかし、10年やって気づいたことは、ある名言ですけど、「過去と他人は変えられないけど、未来と自分は変えられる」。まさに一番変わったのは、自分自身だったなということに気がつきました。

そして、このイベントのときも、そこにあるものを使うということで、何かやるというと、会場が必要ですけども、最後の打ち上げの大宴会は、我が社の駐車場に大工さんたちが協力して、コンパネで舞台をつくってくれて、外でやるんです。次、お願いします。





そして、飾りつけはというと、芽が出てしまっ捨てられたタマネギであったり、大きく伸びてしまったタケノコであったり、ネギ坊主が出てしまったネギであったり、納屋の中に投げてあった古い道具であったり、そういうものをおしゃれにディスプレイに使用して、田舎の足下にあるものこそ宝だということをメッセージとして伝えてきました。次、お願いします。

そして、小さな町だからできるすてきなことって何だろう。人口が減る、また過疎化するということがマイナスにしか見えない。しかし、もう、これからは、全国どこを見ても、人口減というのは明らかなことであり、私たちはある意味、最先端で暮らしているのではないかと思っているんですね。そして、400 数十名、1年に1回、町のどこかに集まっていただいて、集合写真を撮っております。私の目標は、50 年です。50 年というと、私は90 歳近くまで……。もう17 年続けてきましたけど、90 歳近くまで生きなきゃいけないと。冗談に「美人薄命で心配だわ」と言うのと、夫は「憎まれ者、世にはばかるって言うから、太鼓判を押すよ」とか言ってくれますが、50 年撮り続けたとしたら、この小さな町の集合写真アルバムが1冊できたら、どんな町おこしをした地域よりもすばらしい財産が、次の世代に手渡せるのではないかと考えております。次、お願いします。



もうそろそろ時間が、ちょっと気になりますが……。

我が家にはキムチという猫がおりまして、これはもう看板猫になったんですね。このキムチが、昔の我が家の呉服屋時代のウインドーにいつも座っているものですから、娘がキムチのために、こうやってディスプレイをしたんです。そうすると、キムチは、日がな一日ここにいるんです。そして、このキムチという猫が古い町並みを歩いていたたり、また、本店の中庭で昼寝をしていたりする写真を撮って、「キムチ展」という写真展を本店の2階でしたんです。





そのときに、うちの次女が、写真だけじゃおもしろくないというんで、「我輩は猫である」じゃないですけど、「私、キムチと申します」という文章を書いたんです。「私、キムチと申します。縁あってこの町にやってまいりました。猫の立場で申しまして、とても過ごしやすい町です。木陰はあるし、みんな顔見知りなので優しくしてくれます。だから、逃げたり隠れたりいたしません。あれは、都会の泥棒猫のやることです。最近、ちまたでは、いやしやら和みやら耳にいたしますが、本当のいやしをお見せしましょう。これは、私たち猫の文化ですから。最近の人間は何かと忙しくて、猫の手も借りたいわなどと申されますが、決して貸してあげません。私たちは代々、この文化を守っていくのですから」みたいなことを書いてあって、最後には、「人間は、人間の文化を守っていますか」と説教までしている文章が掲示してあるのですが、こうやって、猫1匹でも、いろいろなメッセージが送られる。

実は、今日お渡ししているこの新聞記事は、かつて業者さん向けの展示会のために書いたDMの文章を、そのまま載せているんですけれども、いつも封筒をあける前に、封筒の表書きでちょっと一笑いしてもらいたいと、笑い話を書いているのですが、つい昨日が締め切りでして、今回はこういう文章を書きました。「キムチは猫変、大吉さんは豹変」。大吉さんというのは、夫の名前です。猫変というのは、猫の変。普通は「豹変」という言葉ですけど、猫が変わると書いてですね。

「ひどい毛玉ができてしまって、サマーカットしたキムチは、豹変ならぬ猫変というところでしょうか」。首から上はキムチなんですけど、首から下は全部毛を切ってしまって、ふだんチンチラというのはふわふわの毛なんですよね。ところが、全部毛を刈って、しっぽもひょろっと細いものですから、顔はキムチだけど体は変わってしまったわけですね。

『豹変とは、今は悪いほうに変わることに使うことが多いですが、本来は、「君子豹変」の言葉があるように、君子、つまり、徳が高く、品位の備わった人は、自分の過ちに気がつけば、即座に改めて面目を一新するという意味があるそうです。今の日本、お偉い方々ほど、過ちに気づいても改めようとしない。困ったものです。また、豹変には、自分の言動を明らかに一転させるという意味もあるそうですが、大吉さんの得意わざです。本人は「変わったのではない、進化したのだ。」と言うのですが』という文章を書きました。

朝言ったことが、もうお昼には変わっているんですね。社員は振り回されるわけですが、「変わったのではない、進化したのだ」と、「いいことだと気がいたら即座に変える、これが大事だ」といつも言われるのですが、豹変という言葉ネタに、こういう文章を書いたんです。

私は、デザインをしたり、物をつくって販売したりするのがビジネスとは知っておりますけれども、今、思いますと、何かしらビジネスを通して世にメッセージを送りたいと、そんなことをずっと考え続けてきているような気がいたします。次、お願いします。



キムチが出れば、このゲンさんという犬を紹介せざるを得ないんです。このゲンさんは、ふだんはこんな顔ではないんですね。これは、マムシに咬まれてはれているんです。カーンおじさんのように、こんな顔になったんです。かわいそうだけでも、笑っちゃうんですね。もう唇までがひっくり返って、アップで見ると、本当に笑っちゃうんですね。私は、ふだんのゲンさんの顔と、このはれた顔をリバーシブルに印刷しまして、元気札というのを皆さんにお配りしています。なぜかといいますと、ゲンはこのとき、一番つらいはず。自分が一番つらいときに人を笑わせる、そういうユーモアこそが元気のもとですよということで、元気札。猫にしましても、犬にしましても、何かしらメッセージのネタに使えるなど。



その次のネタですが、我が家のオス3匹というところちょっと問題かもしれないけど、夫の松場大吉です。おもしろい人でして、上の写真ですね。萩の町で、「江戸を遊ぶ」というイベントがありました。萩の町ではその日、お武家さんをしたり昔のお医者さんの格好をしたり、女性は町娘の格好をしたり芸者さんの格好をしたりして、衣装を借りてやるんですけど、夫は何をしたかといいますと、こじきさんをしたわけですね。そして、「こじきは、3日やったらやめられないというけど、あれは本当だ」と。「自分の社長の時給よりも、こじきさんのほうがよかったぞ」と言って大笑いしていましたけれども。

夫が言うのには、こじきにはこじきの流儀があると。また、お金を恵んでくれるとき、

その人のお金の入れ方一つで、その人の人格がわかると。大変いろいろ勉強になったと。若くして社長にはなったけれども、「社長、社長」と言われているが、時には、こじきさんになって、あの目線から世間を見ると、ふだんには見えないいろいろなものが見えてくると。将来は、こじきをするのが夢だと言っております。

この人の性格はと聞かれると、私はいつも、優柔不断、臨機応変と言います。優柔不断というと、悪い意味で使われがちですけども、字で見ると、優しくてやわらかくて断じないという、いい意味のようですよね。赤瀬川源平さんのところの家には、「優柔不断」という掛け軸がかかっているそうです。

確かに、決めてかかるということほど危険なことはないなと思います。私は、どちらかというと、血液型がA型でまじめ人間でして、二者選択で物を考えがちなんですけれども、常に夫は、第3の道をするって抜けるという、ずるい手を使う人でして、臨機応変といいますか、松場家は、つぶしがきくというのが家訓だと言われました。

夫が、大学をどこかに決めたときには、夫の父は、その大学はつぶしがきくのかと聞いたそうですけれども。まさに、ダーウィンの進化論ではないですけど、強いものだけが生き残れるわけではない。また、賢いものだけが生き残れるわけではない。環境の変化に耐え得るものだけが生き残れるという、確かに、臨機応変、優柔不断という性格は、生き残るには必要な要素かなと思います。次、お願いします。



そして、私はあちこちお招きいただいたときにいつも言うんですけど、偉い先生の話は参考にしていいけど、信用するなら、地元のこういう仲間ですよと、言うんですね。大工さんだったり、左官屋さんだったり、鉄工所のおじさん、これは私の地元のボーイフレンドたちですけども、私が7軒の家を再生していく背景には、こういった仲間がいて、一緒に楽しみながら、遊びながらやれたということが本当に幸せだったような気がいたします。次、お願いします。



次世代へということで、私の三女ですけれども、私が再生しました阿部家という家の奥座敷で結婚式の記念写真を撮りました。そして、ここの床の間に、「心想事成」という掛け軸があります。心に思うことが成ると書いて、「しんそうじせい」と読みます。

人はよく、事がならないときに、自分には才能がない、時間がない、お金がないと、できない理由を言いますけれども、私は、思う気持ちこそが一番のエネルギーになると思います。私も、お金がありませんでした。才能があるとも思えません。しかし、こうありたい、こうしたいと思う気持ちだけは、人一番強く持ち続けたのではないかと思います。次、お願いします。



そして、みんなで撮った記念写真ですね。立派なホテルで、お色直しを何遍もして、フルコースが出る結婚式もいいかもしれない。しかし、地元の小さな神社で式を挙げ、阿部家の再生されたお座敷で披露宴をし、みんなで記念写真を撮る。近所の人たちやスタッフが、台所は賄ってくれました。



そして、なぜ、こういうことを一生懸命やっているかという、これは孫の樂ちゃんですけれども、私たちの娘の世代、そして孫の世代、ひいてはその先の世代に、今、自分たちが何ができるのかということは、単なる経済活動だけではないだろうということだ思うんです。

私たち、お金もない、力も何もない人間が、過疎のどん底の石見銀山で、何とか食べていけて、今は100人を超えてしまいましたけどスタッフにお給料を払い、生活をしていく。夢と一緒に、志と一緒にして働ける。それはやはり、その土地に先人たちが残してくれた財産があったからこそだと思うんです。それに感謝しながら、それでは自分たちが今、何ができるかということ、やっぱり考えていくということが大事ではないかと思っております。これが最後になりました。

そして、話の途中に少し入りましたけれども、JRの高尾の北口に、私ども、この春に店をつくりました。高尾山というと、ミシュランの三ツ星がつきましたので、「さすが先見性がありますね」なんて言われる方がありますが、実はあれは京王線のほうが大変にぎわっておりまして、JRの北口というと、お墓参りに行く人しか通らないようなところなんです。

しかし、私たちが目をつけたのは、その木造駅舎です。大正天皇が亡くなられたときに建てられた駅舎が、唐風の立派な屋根のついた駅舎ですけれども、私たちは何とか、その古い駅舎を残したいという運動に広げていきたいということで、そこに店をつくりました。

そして、「一言堂」「群言堂」が今、並んだわけですが、何と不思議な縁といいますか、八王子といいますと、先ほど申し上げた大久保長安が江戸時代、代官をして治めた土地です。そして、私が手に入れて10年かかって直してきた阿部家は、その大久保長安に召し抱えられていた役人の家でございます。そして、また、駅舎を設計した人は、出雲大社の大社駅というと、今の出雲駅ではなくて古い駅舎、すばらしい駅舎が残っているんですが、その駅舎を設計した曾田甚蔵さんという方の、同じ設計者のものだったんです。不思議なご縁で導かれたように、そういう場所を与えられて、今はまだまだ厳しい状況ですが、私たちはその駅舎を使って、駅が単なる通過の場所ではなくて、新しいコミュニティの場にしたいと考えています。

高尾の町の人たちと組んで、高尾の町に無農薬のお米でおいしい米粉のパンをつくる業者さんがあると聞けば、その方たちと組んで、パンを売らせていただく。また、そこに玄米でおいしいおにぎりをつくる方がいらっしゃると聞けば、そのおいしい玄米のおにぎりを売らせていただく。また、その周辺の農家の方たちの農産物でファーマーズマーケットを開いていただくとか、地元の商工会にも参加して、一緒につくり上げていく店にしたいと努力しています。

そして、駅弁講座というのをやりまして、駅弁とは、駅で買うお弁当を駅弁といいます。それに乗っけて、駅で弁じるの駅弁と重ねまして、みんなで一緒に駅弁を食べて、そして私たちのブレーンの方にゲストに来ていただいて、毎月1回、駅弁講座というお話を

を開いております。物を売るだけではなくて、地域の人たちと新しいコミュニティーをつくりたいという夢を持って、これが一つの事例として何とか成功をおさめて……。

J Rの東日本だけでも、無人駅が 400 か 500 あるそうですね。その無人駅をもっと活性化させる方法はないのだろうか。無人駅一つを利用していくだけでも、すごくおもしろい夢が広がるんですね。新しいビジネスのあり方を今、模索中です。

もし高尾の方面においでになる機会がございましたら、のぞいてみてください。

以上で、お話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)